授や事務の整頓にさへ間に合はぬ程で地方の學校等にては到底望むべからざる事といふならん、然れども余が以上述べたる遊戯上の價値より言へば其教場の教授力の幾分を割愛しても遊戯上に其力を用ひたく思ふのである、一定の見識を有する教師とすれば單に教授法の形式や、余り必要もなき規則や、帳簿の末にのみ走ることなく小學校令の明示するごとく、兒童身体の發達に留意して道德教育及國民教育の基礎を作ることに注意せねばならぬ、又訓練の行届きたる上にて教授法も價値を表はすものである、而して斯ることの多くは遊戯場にて成効することが多く、成効せしむるに便利なることは以上述べた通りである、讀者諸氏は之に依て遊戯場の價値と其の監督上に於ける注意の必要なることを了解せしならん、之れ皆余の遊戯場の眞價を社會に發表せんとする熱情に出でたるものである、幸に諒恕せられ諸士の賛同を得て大に之が眞價を表はされんことを。

惣菜料理

石井泰次郎

椀

常盤豆腐

豆腐を、一寸厚さ二寸角くらゐに、切り、成るべくこまかに、下まで切り通さずに、横にも竪にも切目を入るゝ事、菊豆腐の如くなして、くづさぬやう取りあつかひて薄き葛ゆにて湯煮す、

葛粉と水とを鍋に入れ、火にかけ、葛のかへる迄箸にてかきまわし居るべし、火にかけて其まゝ置きては、葛粉下に沈みてこげつくなり、注意してかきまわし居るべし、さて葛粉の煮えたらば、切りたる豆腐を入れ湯煮するなり、あまり煮すぎぬやう、あたゝまりたらばよろしきなり、

又一方には白味噌を摺りてうらごしなし、なべに入れ砂糖、みりん酒、少しの水等を加へ、火にかけて煉る、程よく煉れし時、

獨姑をあらひ皮をむき去りて、卸し金にてすりおろし味噌の中へ入れて交ぜ合し、ほうれん草より

取りたる青粉にて色をつけ、火よりおろすなり、あまり堅すぎぬやうに、煉るべし、

さてあたゝめたる豆腐を、しづかに目杓子にてすくひ上げ、しづくをきつて椀に盛り、右の味噌を上よりかけて進むるなり、豆腐の切りたる間々へ青きみその入り、松のやうに見ゆるとて、ときは豆腐と名づけたるなりと、古くより傳はり居る料理法なり、

○青粉の取り方は、ほうれん草をよく洗ひ、葉のみを摘み、擂鉢に入れてよく擂り、水を入れて又しづかに少しすり、水と合せ、別の器の中へ、布巾にて漉し入れ、布巾の上にたまりたる滓は取り捨て、下に漉し出でたる水を鍋に入れ火にかけるなり、煮えたつに隨ひ、水は清く濟み（はじめは青くにごり居るなり）、青粉の部分のみ上面に、一とかたまりとなりて浮ぶ故に、それをすくひ取りて、用ふるなり、

○原料割合は、豆腐五切れにつき白味噌五十匁、砂糖二十匁、みりん酒三勺、水五勺、うど小一本ほうれん草小一把位なり、

小皿　玉子燒まがひ

（原料）氷蒟蒻十枚、醬油二勺位、玉子三箇、砂糖三匁

氷こんにやくを水に浸し置き、しぼり上げて鍋に入れ水を加へて湯煮し、再び水に取り、冷し、しぼる、

鷄卵を鉢などへ割り入れ、醬油、砂糖を加へてよくかきまわし、しぼりたるこんにやくを入れ、箸にてかきまわして、よく玉子を浸みさすなり、

次に玉子燒なべに胡麻の油をしき、火にかけ、あつくあたゝまりたる所へ、玉子をしみさせたる蒟蒻を入れ燒くなり、少しこげめ付く程燒けたる時箸にてうらかへし、又一方を燒くなり、

角、或は三角などに程よく切りて、器に盛るべし、

小猪口　林檎あへむきみ、

あさりむき身を、目笊などへ入れよくあらひ、鹽湯にてざつと湯煮し、直に又笊などへ入れてしづくを切り置く、

りんごは、皮を剝ぎ、おろし金にて擂りおろし、直に鍋に入れ、砂糖、鹽、等を加へ、火にかけ木

杓子にて煉る、右のむきみを、煉りたるりんごの中へ入れ、箸にてかき合て、盛るべし、

文苑

○春望　肥塚南山

此處彼處みかへるおもはかすみつゝ
錦色そふ麥ふなの花

○山吹　前野壽賀子

行春をしはしとゝめてゐし垣の
八重山吹は咲き出でにけり

○春風　若海保子

かけろふのをのゝ百草おしなべて
緑ふかむる春風ぞふく

○閑座春雨　横田やな子

つれ〳〵と訪ひくる人を待わびて
なかめくらさん庭の春雨

○春月　横田秋足

伊歌おろしまだ寒けれど淺妻の
渡りにかすむ春の夜の月

○水邊柳　小島平

いなむしろ河そひ柳ふく風に
波もわやかる心ちこそすれ

○山家鶯　鹽野奇零

梅かはる風のたよりにさそはれて
山家の垣にうくひすのなく

おさな子　郁子

軒の櫻はほころびて
卯の花匂ふ垣のもと
でん〳〵太鼓や犬張子
いつしか母の膝により
乳房ふくみて幼な兒は
可愛ゆき笑窪たゝへつ
憂き世の科も人の身の
神にも似たる姿して
汝が少さき其胸は
來る憂の影もなく
尚清らかに澄みぬらん
春をば送り秋を迎へ
重き務をつくせかし
天は汝を守るなり

蝶の羽風もいと優に
緑の芝生に打ふして
樂しく持ちて遊びしが
うすくれなゐの唇に
樂しき遊びを夢みてか
安きねむりに入りにけり
犯せるつみもなき稚兒は
愛のしとねに打ふせり
過し涙のかとゝなく
谷の清水のそれよりも
尚其まゝに幾度の
いと安らかに人の世の
幸多き世を送れかし
自然は汝を慰めん